中山大学人文社会科学出版基金资助

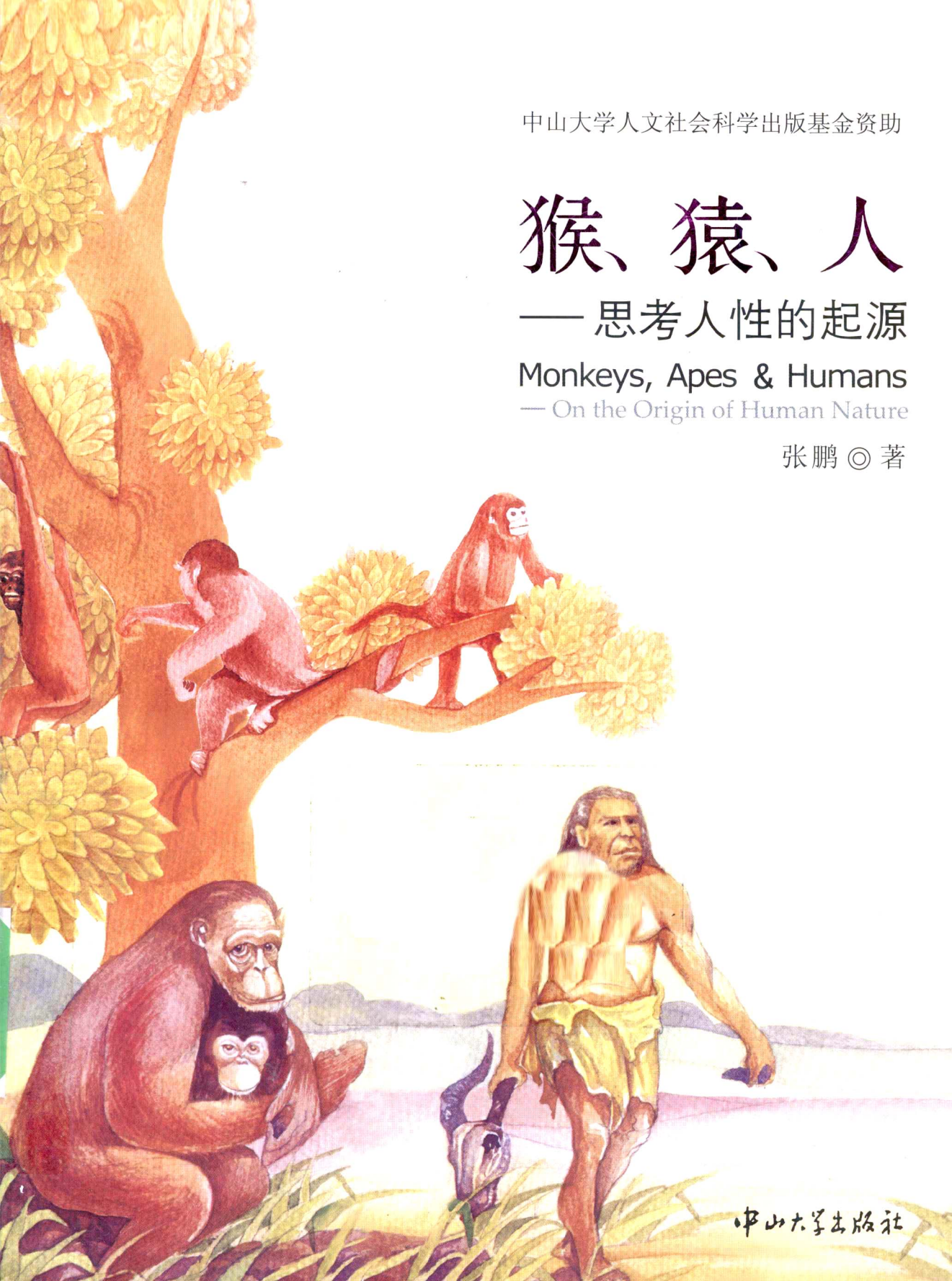
猴、猿、人

——思考人性的起源

Monkeys, Apes & Humans

— On the Origin of Human Nature

张鹏◎著



中山大学出版社

中山大学人文社会科学出版基金资助

猴、猿、人

——思考人性的起源

Monkeys, Apes & Humans

— On the Origin of Human Nature

张鹏◎著

阜阳师范学院图书馆
藏书

中山大学出版社
·广州·

版权所有　翻印必究

图书在版编目（CIP）数据

猴、猿、人：思考人性的起源/张鹏著．—广州：中山大学出版社，2012.1

ISBN 978-7-306-03974-3

Ⅰ.①猴…　Ⅱ.①张…　Ⅲ.①人类起源—研究　Ⅳ.①Q981.1

中国版本图书馆 CIP 数据核字（2012）第 181521 号

出 版 人：祁　军
策划编辑：翁慧怡
责任编辑：翁慧怡
封面设计：林绵华
责任校对：陈　霞
责任技编：何雅涛
出版发行：中山大学出版社
电　　话：编辑部 020-84111996，84113349，84111997，84110779
　　发行部 020-84111998，84111981，84111160
地　　址：广州市新港西路 135 号
邮　　编：510275　　传　真：020-84036565
网　　址：http://www.zsup.com.cn　　E-mail:zdcbs@mail.sysu.edu.cn
印 刷 者：广州市怡升印刷有限公司
规　　格：787mm×960mm　1/16　23 印张　384 千字
版次印次：2012 年 1 月第 1 版　　2012 年 1 月第 1 次印刷
印　　数：1～3000 册　　定　价：48.00 元

如发现本书因印装质量影响阅读，请与出版社发行部联系调换

内容简介

毫无疑问，人类是600余种灵长类中的一种。解剖学者说猿猴的手掌、指纹、大脑等身体结构与人类似。行为生态学者说猿猴的行为和复杂社会关系与人类似。人类学者说猿猴的工具使用技能和文化传播可能接近于人类的雏形阶段。心理学者说猿猴是地球上最聪明的动物。保护生物学学者说有猿猴生活的森林一定是最健康的森林，保护猿猴就是保护森林生态。医学工作者说猿猴的免疫系统接近于人，是克服人类疾病的最佳模型动物。分子生物学者说黑猩猩属与人类基因相似度高达98.7%，是与人类最近缘的物种。可以说，猿猴是一面多棱镜，从方方面面映射出人性起源的背景。

本书是目前国内第一本综合介绍灵长类知识的书籍。书中全面讨论了人与猿猴的异同，尝试从灵长类进化的新视角探索人性起源，解释人类的共通性及其生物学本质，并为读者提供理解自身的新思维。第一章介绍了人类的生物属性，第二章进一步详细介绍了近代灵长类学的诞生与发展过程；从第三章到第十章，分章节介绍了灵长类的起源与分类、生态、行为、社会、文化、智能、疾病与遗传、生命伦理与保护等各方面知识。第十一章总结了人类与猿猴的区别，以及解答如何界定人类等长期未解的自身谜团。

本书图文并茂，内容丰富，知识性和可读性强，通俗易懂，适合于大学师生，尤其适合于校外对野生动物、人类起源感兴趣的读者群，诱发人们对人类自身和野生动物的探索兴趣。

序　一

渡边邦夫　日本京都大学教授　2011 年 8 月 28 日

第一次见到张鹏是在 2001 年冬天的金丝猴研究基地，当时他刚刚 22 岁。印象中他是个性格开朗的年轻学生，每天攀登秦岭的陡峭崖壁，追踪调查一群野生金丝猴。他硕士毕业后，获得日本政府国费奖学金，顺利来到我的研究室进修灵长类学博士学位。日本灵长类学开始于 1948 年。创始人今西锦司曾是京都大学理学部的一名业余教师，一次他带着两名本科生去九州南部的都井峡做野外调查，意外地遇到了一群野生猴子，从而对研究猴群内的社会关系产生了兴趣。研究动物社会只要纸和笔就可以进行，是个比较容易开展的研究方向，尤其适合于刚刚在“二战”中战败的日本国内研究者生活困难且没有经费的现状。不过当时的日本社会并不接受这一研究领域，认为几个研究者追着一群野生猴子玩，又不能提高人的生活水平，有什么研究价值呢。那么下面我想简单介绍一下日本灵长类学是如何在日本社会立足，随后如何形成世界顶级学科的过程。

“二战”前，日本社会以儒家思想为基础，重视等级关系和家庭亲情。整个社会就像一个大家庭，以日本天皇为中心，世世代代维持着稳定的社会秩序。1945 年 8 月“二战”战败后，日本社会的基本思维模式和价值观被完全颠覆。曾经被人们尊为神灵的天皇，突然宣布自己是个平凡的人，鼓励大家接受个人自由平等的西方思想，强制导入美国式思维模式。昨天，教师和公众媒体还在高呼“要与英美魔鬼抗战到底”，今天却转而极力赞美起英美文化。日常生活中价值观的急剧转换，使日本社会失去了自己的信念，大多数人开始茫然失措。把以往的言行和信仰忘得一干而净，有人开始努力追求金钱名利，也有人依然维持着传统的价值观。

我出生于 1947 年，从 1970 年开始研究猴子。当时，日本灵长类学者之间围绕着“日本猴群中有没有猴王”的问题产生了激烈的论战。众所周知，日本猴群是以等级制和母系血缘制为基础，维持着非常严格的个体关系。很多人以为猴王是群内最高等级的雄猴，

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

保护猴群成员，并且带领着猴群移动。如果群内出现分歧，猴王会判断正误，对错误一方进行惩戒。和人类社会类似，猴群中也应该有严格的社会秩序，所有社会成员的活动都要遵循这一社会秩序。这些想法成为一种教条，甚至被列入小学教科书。实际上，“二战”前人们一直捕杀猴子，很少仔细观察野生猴群，关于猴王的角色多是人们的主观臆断。“二战”结束后，人们开始亲近和喂养野生猴群，猴子也不再惧怕人们。通过近距离观察，研究者们发现猴群里似乎没有猴王。根据严谨的科学分析，研究者们发现不同地区的猴群情况各异，有着不同的等级关系和血缘关系，群内高等级雄性的行为方式也各不相同，这样就推翻了日本猴群内普遍存在严格社会制度的观点。猴群中也不存在猴王。每个猴子有着各自的性格，根据自己的特点在群内演绎着自己的角色，而没有达到形成社会制度的程度。如果说以往的研究是从猴群整体结构出发考虑的话，那么如今的研究则是根据每个猴子的个体行为，重新思考猴群的社会结构。这一研究方向的转折实际上反映了社会学中整体论和还原论的对立，这种对立现象至今仍然存在。猴群中的确存在等级和血缘关系等特征，群内最高等级的雄性与其他雄性的行为也不同。但是这些特点是否能被称为社会制度，还是说只不过是猴群内的某种维持方式，这在学界未能达成一致看法。

有意思的是，“二战”前出生并且接受战前教育的研究者，一致肯定猴群内有严格社会制度的特点，接受战后自由平等思想熏陶的研究者则一致否定这一观点。日本灵长类学创始人今西锦司出身于京都市富商家庭，作为家里的长子，他保持着根深蒂固的传统父权思想。当时京都的许多研究者都和今西一样，出身富家，依靠自家财产维持研究。日本当时存在这种社会基础和文化。但是“二战”后，随着财阀解体，社会逐步平等，人们的思维方式也改变了，个体思想更加多样化。在那个激荡的社会中，很多研究者开始思考我们应该继承哪些传统理论，或是应该开创什么样的新理论，于是出现了各种各样的争论。社会激荡促使人们思考人类社会的本质是什么，它和人类的存在有什么关系。虽然同样都是日本人，但出生年代不同，受教育背景不同，思考这些问题的起点也会不同。近代日本更加崇尚个人主义，灵长类学也出现了从研究“整体社会”到分析“个体特点”的过渡趋势。

日本灵长类学之所以能够受到世界注目，是因为日本人没有西方文化中的“上帝”信仰，没有上帝创造世界的观念，而具有人和

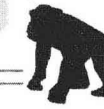
动物可以生死轮回的佛教思想。也就是说西方基督教教导说，上帝创造世间动植物之后，根据自己的肖像创造了人类，所以人类在这个世界上与其他生物截然不同，是接近于神灵的。因而西方科学家不认为动物有社会性或者有个体差距，更不会考虑猴子社会中有“文化”。而日本灵长类学者认为每个猴子都有其特点，开创了个体识别的研究方法，这对于早期灵长类学的发展有着不可低估的作用。只有识别了个体，才可能了解群内个体差异，及其由个体组成的复杂而多变的社会。人类学者也可以根据研究动物行为生态而探索人类社会、行为的进化背景。现在，动物具有文化行为的观点已经被大众接受，但是半个世纪前如果有人提出这样的观点的话，则会被学术界耻笑。我想说的是新学问不是模仿来的，而是由不同文化背景的人们，在时代变革中追本溯源，不断研究探索，根据自己的所思所想所感而产生独自的思想和理论。所以，人类社会多样性是我们人类共同的重要遗产，无论如何也不能够失去。

张鹏在金丝猴和日本猴研究中有不少成果，而且在 2008 年获得了京都大学校长奖。此后开始编写灵长类学的教科书，这是他写的第二本书。与前一本相比，这本书的内容更加丰富，而且对人类社会进化有了更深刻的思考。从他身上，我也能感受到中国年轻学者对灵长类学的热情。任何学问如果只局限在研究者的兴趣的话是不会有太大发展的。就像这本书中提到的，灵长类学是探索人类生物本性的科学。这个命题在所有学术领域中是共通的，只是灵长类学是一门更加直接探讨“人类本性”的学问。我个人并不认为欧美关于人类本性的价值观就一定好。中国在悠久的历史中形成了独特的文化。虽然近年全球化浪潮使得国家间的壁垒减少，价值观更加单一；我们无法否定世界变得越来越小，国家间的交流越来越频繁，但是人们心中的文化差异仍然根深地固地存在着。毫无疑问，这些文化差异和独特性将是形成新研究领域的驱动力。希望这本书能够为探索人类生物本性提供新的方法论，在中国开启一个新的研究领域。

最后需要提出的是，我的中文不太好，尚不能够完全理解书中的内容。作者张鹏在书中的阐述不免会存在个人主张和偏见，所以希望读者能够更加客观地阅读这本书，在此基础上建立自己的观点。随着社会的持续和时代的变更，我们需要不停地革新自己的思想。实际上，灵长类学的真正乐趣就在于，它是一门能够跟随时代和人类价值观变化而变化的学问。

（张鹏　翻译）

序—日文原文



渡邊邦夫　京都大學靈長類研究所　2011年8月28日

張鵬君と会ったのは2001年の12月、キンシコウの調査地であった。彼は当時22才、毎日急峻な山道を駆けめぐってキンシコウの群れを追いかけている、明るく闊達な好青年であった。その後、彼は日本政府の奨学金を得て、私の教室に留学してくることになる。日本の霊長類学がスタートしたのは、1948年の末である。京都大学理学部の無給講師であった今西が、二人の学生と共に九州南端の都井岬を訪れ、ニホンザルの群れに出くわしその魅力にとりつかれたのが契機となった。敗戦直後の研究費どころか日々の生活にも困っていた日本人研究者にとって、動物社会の研究は野帳と鉛筆さえあれば誰にでも始められるものであり、その点ではとっつきやすい学問分野だった。だが困窮した社会状況の中で何の役にも立たない、場合によっては知的な遊びとしか思えないような研究が、たやすく日本社会に受け入れられたわけではない。日本の霊長類学が、何故日本社会の中に受け入れられ独自の発展を遂げたのか、また世界をリードする学問分野として国際的な注目を集めるまでになりえたのか、その点について若干ふれておきたい。

戦前の日本社会は、良かれ悪しかれ儒教的な社会秩序が維持された、上下関係や親子のつながりが非常に大事にされた社会であった。そして日本国民は天皇を中心にした、万世一系の大きな家族のようなものだというのが社会的な通念であった。1945年8月の敗戦は、こうした日本社会の根本にあった思考のパターン、価値観を完全にひっくり返してしまった。神だと思われていた天皇による自らの人間宣言があり、個々人の自由平等を掲げたアメリカの思想、アメリカ的思考方法が強制的に導入された。今でも当時の人々の口の端にのぼるのは、昨日まで”鬼畜米英”と国民を戦争に駆り立てていた教師やマスコミなど世の中の全てが、あ

っという間に米英文化礼賛へと変わってしまったということである。日々の生活における全く違った価値観への転換であり、いったい日本社会の何を信ずればいいのか、大多数の人がその狭間でとまどい悩むことになった。それまでの言動などすっかり忘れて、器用に金儲けに励む者もあれば、古い価値感を大事にしたまま自ら没落していった人たちもいた。

私個人は戦後の1947年生まれで、サルの研究を始めたのは1970年である。その頃、日本の霊長類学者は内部で激論を戦わせていた。曰く、「ニホンザル社会にボスはいるのか、そんなものはいない」というのがもっとも大きな論点である。良く知られているように、ニホンザルの社会は順位制と家系制に基づいた、非常に厳格な個体間関係によって維持されている。もっとも順位の高いオスザルが、ボスザルあるいはリーダーオスと呼ばれる存在で、群れのメンバーを外敵から守り、日々の遊動を導き、群れ内の争いがあれば適切に判断して、悪い方を懲らしめる。人間社会同様、サルの社会にもきちんとした社会秩序があり、サル社会の構成員は全てその秩序に基づいて行動していると考えられたのである。それは定説となり、小学校の教科書にまで取り上げられていたのだが、戦後30年も経った頃には、そのような立派なオスは群れの中には見あたらなくなっていた。一つの大きな要因は、かって狩猟によって絶滅寸前まで追い込まれていたニホンザルが餌付けされ、人を怖がらなくなったということである。当時の中堅どころの研究者が言う。観察したときに確かにそう思えたことも、きちんと調べ直してみると様々な変異があり、こうした行動をどの群れのどのボスザルもするわけではない。また順位関係や血縁の及ぼす影響も群れによって異なる。だからニホンザル社会が厳格な社会制度に基づいたものだいう考えは誤りである。ボスザルという特別な社会的地位も存在しない。あるのは、それぞれ個性の異なるサルが、それぞれの状況に合わせながら、異なった役割を担って行動しているだけで、社会的な制度にまで言及する理由はない。あくまで個々のサルの行動に立脚して、サルの社会観を再度組み立て直すべきである。つまり社会学的な全体論と還元論の対立であった。現在もこの議論に決着がついたわけではない。たしかにニホンザル社会の最優位オスは、他のオスとは異なった

行動をするし、特別の存在である。順位と血縁がニホンザル社会の重要な要因であることに変わりはない。だが社会制度とまで言えるかどうか、そのようなものをサル社会の統合原理として考えて良いのかということである。

今になって興味深いのは、ニホンザルに厳格な社会制度を見いだそうとしていたのは、戦前に生まれ、戦前の教育を受けた研究者であった。それを否定しようとしたのは、戦後に教育を受けて、自由と平等を基軸にした考え方を身につけた人たちであった。日本の霊長類学の祖とでもいうべき今西が、京都の古い大きな商家の長男として生まれ、かっての家父長的な思考を強く持っていたことは良く知られていることである。京都エリートと呼ばれる多くの研究者が、今西同様良家の子弟であり、自らの資産を食いつぶしながら研究を続けていた。そうした社会的基盤、文化がが日本にもあったのである。戦後財閥は解体され、より平等な社会になると共に、日本人の考え方も変わり、観察したことの解釈にも差が生まれてきた。かって多くの研究者がニホンザル社会の中に期待したものは、戦後の思想的混乱の中で、どのような思考体系を引き継いでいくのか、新たに作り出していくのかということであり、その争いがこの論争には反映されているのである。社会的な混乱が、逆に人間社会とは何なのか、人間存在とどう関わりあうのか、その探究へとつながり、時代的思想的背景の違った同じ日本人が、それぞれの存在基盤となる“思い”をかけて論争していたのである。最近の日本ではより個人主義が進んだためか、霊長類学は社会よりも個々人の“心”の問題を直接扱うようになってきているかもしれない。

日本の霊長類学が世界的に脚光を浴びるようになった背景には、日本人が西洋的な“神”の信仰、つまり絶対的創造主という観念を持っていなかったということがある。そして死後別の人間なり動物なりに生まれ変わるという仏教の輪廻思想を持っていた。つまりキリスト教の教えでは、神が様々な動植物を作った後に、自らに似せた特別な存在として人間を作ったという。だから人間はこの世界では特別な存在であって、他の動植物とは画然とした違いがある。西洋の科学者達が、動物に社会があるなどとは考えもしなかったし、個体による差もとるにたらないもので、まして

やサル社会の“文化”などは思いもしないことであった。初期の霊長類学の展開にとって、個体識別という新しい方法論がどれだけ重要だったかは計り知れない。それはサル社会にも個体毎の個性とでも言えるような違いを見いだし、そうした様々な特徴をもった個体が実に複雑で変化に富んだ社会を作っているのだということを明らかにする出発点となった。またそれを汎人類学主義とでも呼べるほどに、人間社会、人間行動への進化過程の道筋としてとらえていった。今では多くの動物種が文化的な行動をすることは当然の如く考えられているが、半世紀前にはこうした発表をすると、学会では嘲笑を浴びたということである。私がここで言いたいのは、新しい学問というのは模倣からは生まれない。それぞれの文化を育んできた人たちが、時折々の社会的軋轢の中で悩み、真から考え抜いて、それが知的興味へと向かったときに独自のものが生まれるのだということである。その意味では、人間社会の多様性は絶対に失ってはならない、我々人類の大事な共通遺産なのである。

張鵬君は、キンシコウとニホンザルと両方の研究で多くの成果をあげた。2008年にはその功績により京大総長賞も受けている。そして霊長類学の教科書を書くという。本書は2冊目であり、前著と比べるとさらに多くのトピックを紹介し、かつ人間社会への進化をより深く見据えた多くの論考を盛り込んだものになっている。私は、その中に私自身かって経験したような中国国内の息吹を感じる。どのような学問分野も、研究者たちだけの知的興味だけでは大きく発展することはできない。張鵬君が本書で書いているように、霊長類学とは我々人間の存立する生物学的基盤を明らかにする学問である。この命題は、霊長類学だけではなく全ての学問領域に共通している。だがしかし、霊長類学はより直截に“人間的なもの”を見いだそうとする学問なのである。私は必ずしも、欧米風の価値感に基づいた人間のとらえ方がいいとは思わない。中国には中国の長い歴史に基づいた独自の文化がある。近年におけるグローバリゼーションの波は、一挙にそうした国家間の隔壁を取り払い、ただ一つの価値観への統合に向かっているかのようにも思える。世界がますます小さくなり、国家間の交流が頻繁になることは否定しようもないけれども、人々の心の底に根付いた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

文化の違いは、まだまだ長く残っていくことであろう。そうした独自性、ユニークさが、新たな研究分野の推進力となることを、私は疑わない。この本が、中国における新たな学問分野、人間的なものの解明に向けた独自のフィールドを作り出す出発点になることを期待している。

一言、断っておかなければならないが、私は中国語ができないし、必ずしも全て書かれていることを理解しているわけではない。あるいは張鵬君による独自の誇張や説明不足、誤解等も含まれているかもしれない。読者には、本書を批判的に読みながら、自分自身の考えを作り上げる礎にして欲しいと思う。我々人間の社会が続く限り、時代の変化があるたびに、我々人間はいつも自分を見つめ直す作業が必要なのである。こうした時代と共に変わる人間の価値観とのかかわりこそが、霊長類学の醍醐味なのである。

序　二

麻国庆　中山大学人类学系　2011 年 10 月 20 日

2002 年我在东京都立大学社会人类学研究科做客任副教授时，当时的主任大塚和夫教授在一次讨论会上拿着一本刚出版的由京都大学菅原和孝著的《感情的猿 = 人》向我们推荐说，这本书是近年来在日本人类学关于人性的讨论方面非常有影响力的著作。我随即买了此书，从中看到人类学的“感情”研究如何与灵长类的研究结合起来，从而更好地把握人类的本质。在该书中作者提到以田野调查为基础的人类学家，主要是对于他者的行为空间的记述，而人类之外的另外一个他者就是灵长类。而这个特殊的他者和我们人类一样有其自身的社会和文化，也像我们人类一样有着丰富的感情世界，所以作者用“=”号，把猿与人等同起来看待。我们知道，现代人类学的研究方法除田野调查之外，很重要的一个方法就是比较研究。对于灵长类“社会”的研究，不仅仅是在其内部进行比较，还要和我们人类进行直接的比较。如我们人类是“群居的社会”，灵长类的社会也是同样。他们都通过“抑制”、“支配”、“服从”、“依赖”等行为，维持着社会的构成和延续。在他们的世界中，喜怒哀乐等情绪、表情以何种方式表达出来？而像人类文化中的狩猎采集民这样的迁移性社会，其社会构成与灵长类社会有着诸多的相似之处。这也是为什么学界一涉及史前考古遗址，便常常用狩猎采集社会的个案来进行比较、解释的原因。作为一位从事人类学教学与研究的工作者，我也对于曾经是典型狩猎社会的中国的鄂伦春族进行了长时间的调查和研究。对于狩猎社会有着切身的体验，反过来再来阅读灵长类的有关行为研究的成果，颇有亲近之感。记得在给学生授课时，每次讲到狩猎社会时，我就会说从人类的起源算起，人类的历史大约有 400 万年，我们有 399 万年生活在狩猎采集时代，所以，狩猎采集社会的研究对于我们认识人类的本质、社会的形成、社会分工、人和自然的和谐关系有着重要的意义。然而，如果把这一思

考在放到另外一个他者——猿猴的社会中进行比较的话，我们的视野又会变得更加开阔，对于上述问题的思考也会更加有深度，从而能更好地理解人性的本质。

其实在我早期学习考古学时，都是在沿用“劳动创造人”的学说，常常讨论经典作家的语录，如人性的本质包括两个方面：一是人与动物的区别；二是人与人的区别（马克思，《1844年经济学哲学手稿》）。以制造工具和劳动来区别人类与动物的本质，在当时的科学研究背景下有其合理性。但随着20世纪60年代以后一门新兴的学科——灵长类学的诞生和发展，使得人类对于19世纪以来有关人类本质的讨论有了新的思考。如文化曾经是讨论人和其他灵长类区别的重要标志之一，后来经过灵长类行为学的研究，发现猿猴也有文化，如我们熟知的黑猩猩能用细的树枝来吊食白蚁。相当多的研究讨论猿猴取食行为，不过日本猴的泡温泉的行为与取食无关。记得3年前，我第一次在京都国际日本研究中心见到本书作者张鹏时，我们就聊到了温泉和日本文化。当时他马上就回到他的猴子世界，说他研究过日本猴如何泡温泉，认为泡温泉的习惯主要是在母子间以学习的方式传播和稳定下来的。在此基础上他写出了“日本猴温泉文化行为的传播”一文，引发了当地媒体的极大兴趣，经过媒体传播，当地已经变成很热门的看猴子泡温泉的旅游点。

此外，诸如劳动、制造工具、语言、社会性等，也有很多新的讨论。如动物垒窝筑巢、掘穴打洞、觅食哺子也是一种劳动；黑猩猩制造钓竿取食蚁穴的白蚁、制造树叶海绵吸食树洞的水，也是在制造工具；就语言来说，动物虽然不会讲人话，但是也可以通过发声、动作、表情、气味、超声波等方式传递信息，如果与人类比较的话应该是一种非语言行为。就社会性来说，蚂蚁、蜜蜂、大雁等很多动物形成稳定的群居生活，具有严谨的组织纪律，又被称为社会性动物。

对于灵长类社会与文化行为的讨论，应该追溯到日本著名人类学家、灵长类学学家今西锦司（Kinji Imanishi）博士。在对鄂伦春族的调查和研究过程中，我在日本的东洋文库、东京大学东洋文化研究所等机构查阅日本战前和战中对于大小兴安岭的调查中，看到了这位日本学者的名字。之后阅读了他的许多关于内蒙古和东北的田野调查报告。2002年2月，我在东京都立大学时看到了京都大学为纪念今西锦司教授诞辰一百周年，在京大图书馆专为他举办纪念展

览。我专程从东京赶到京都观看了这一展览，从展览中对这位学术大师有了更深的了解。他的研究不仅仅是在人类学、生态学方面，而且对于生物世界有着很深的研究，特别是灵长类学，甚至很多学者称今西锦司创立了独立的学问即生物社会学。在他看来构成生物世界的“最基本的构成单位”是“种”，他把由“种”形成的社会称为“种社会”，明确提出了动植物世界也有自己的社会构成。在此基础上，他对于灵长类研究很大的贡献是文化与人格论。今西锦司大量阅读吸收了文化人类学、弗洛伊德精神分析学说和新弗洛伊德学说，之后又接受消化 Carl Gustav Jung 的心理分析学说。他把这些不同学科的研究，吸收到对灵长类社会的研究中。前面提到的日本猴群社会的文化现象，溯源的话最早就是由今西锦司的研究团队所发现的。有学者总结说美国的灵长类学是以心理学和文化人类学为基础发展起来的，而日本的灵长类学以从动物学到人类学的转型为其特征，这种特点一直在今天还是日本灵长类研究的一个基础之一。正是基于这种学术关怀，今西锦司于 1967 年创立了京都大学灵长类研究所。当时日本刚刚举办了东京奥林匹克运动会（1964 年），国内经济进入快速发展轨道，同时人们的眼界更加国际化，形成了学术上赶超欧美的思想原动力。今西锦司教授在第八届灵长类研究会上，及时提出“所有学科领域中，日本最有可能超越欧美的可能是灵长类学。因为欧美没有猿猴的自然分布，而日本不仅有猿猴，也有渗透在民间文化中朴素的猿猴知识。利用这些自然和文化优势，日本应建立一所综合性的灵长类研究所，将来一定能够领先于世界”。同年 5 月，日本诺贝尔奖物理奖得主朝永振一郎将今西锦司的提案提交日本内阁总理，建议尽快建立一所综合性的基础研究所。日本政府次年通过议案，并于 1967 年组建了京都大学灵长类研究所。从今西锦司的学术足迹中，我了解到京都大学灵长类研究所是目前世界上首屈一指和亚洲唯一的综合性灵长类学研究机构。这所研究机构主要通过对灵长类（包括人类）的综合性研究，理解人类起源和人性形成的生物学基础。

从今西锦司百年的纪念展览中，我也体会到灵长类学的研究和人类学之间的密切关系。加上对于《感情的猿 = 人》等书籍的阅读，我越来越觉得这一学科对于人类学研究的重要性。作为以人类的生物属性和文化属性为研究对象的人类学，不能完全回到以文化和社会为对象的社会文化人类学中，应该有其独立性。2004 年 9 月，我

从日本回到北京大学不久，就来到中山大学人类学系，日益觉得组建一个团队来做生物人类学研究的重要性。记得还是我在中山大学人类学系读硕士时，我们就跟冯家骏先生和黄新美先生学习“人体解剖学”和“体质人类学”，尽管我之后很少从事这方面的研究，但这一学科训练对于我从事社会文化研究以及接受跨学科的知识一直很受用。我认为生物人类学是人类学专业的主干基础课程，对于培养和提高学生的科学素质、科学思维方法和科学研究能力有着重要的作用。生物人类学是研究人类自然属性（Human Nature）的一门学科，通过关注人类生物性变异的研究，试图在科学规范的理论和事实的基础上探讨人类的起源、演化和生物学多样性等人类学的关键问题。在国外院校，尤其是欧美国家的人类学系里基本上都开设了生物人类学的专业，例如美国哈佛大学人类学系、英国剑桥大学人类学系等。日本、德国等国的人类学传统也非常强调对人类的生物学特性和灵长类学的研究，分别组建了德国马普人类进化研究所和日本京都大学灵长类研究所等综合性的研究机构。长期以来生物人类学的理论、原理和方法强烈地诱发人们不断研究的兴趣，启发着人们对人类本性及其生物学特征的不断探索。中山大学人类学系传统上就很重视人的生物属性的研究，但主要是在体质人类学的范畴之内，当时就觉得如果能有从事灵长类行为研究的学者加盟，对于这一领域一定会有很大的帮助。

人生有缘，学术也不例外。或许是“桂月影才通，猿鸣回入风”。正当我在想如何引进这样一位人才时，收到了从未谋面不知底细的张鹏的来信。在信中他说以其所在的京都大学灵长类的研究传统，认为回国的话到人类学系从事研究工作最合适。或许真是有缘，2008 年年底，我正好在京都国际日本研究中心开会，离京都大学的一个校区不远。我就用邮件给张鹏发了封信，希望他在晚上来我住的地方谈一下。那天晚上他按时过来，我们开始了第一次的猿猴之聊。我们从“两岸猿声啼不住，轻舟已过万重山”的“猿”到底为何种类型，“秋浦多白猿，超腾若飞雪”的“白猿”为何，到我曾经去过的福建的齐天大圣庙，甚至包括猿猴的区别，以及其行为和人的关系聊起。日本猴泡温泉也是在这晚我才第一次听到。一直聊到天亮，当然聊得最多的还是他研究的中国金丝猴和日本猴。对于初次会面，我今天还有很深的印象。当时，张鹏与我谈起自己在秦岭研究野生金丝猴的社会生态的一些趣事。最初张鹏很难见到猴子，

后来坚持在野外跟踪半年以后，猴群就不再躲避他，每天都能见面。他发现每个猴子的长相都不一样，就给每只猴子起名字，其中群里最漂亮的雌性就叫“圆脸”。更让我捧腹大笑的是他在日本调查的时候，一只年轻雌性锁定张鹏为初恋目标，向他发出邀配的信号，他以自己对猴子习性的了解，躲避了雄性日本猴的攻击。他告诉我每次出野外都要在深山里生活几个月，没有电话信号，吃饭洗澡都存在困难。我当时就和他说：“对于猴子的研究需要参与观察，而猴子又不会说话，所以一定要有敏锐的观察能力，做人类社会研究的文化人类学者应该加强这种训练。有人类学家写过寂寞的人类学，其实张鹏你们的研究更加寂寞，因为常常几个月或更长时间没有语言的交流。”灵长类研究强调对研究个体的长期观察，由于研究者无法与猿猴直接对话，需要通过长期记录观察对象的行为等数据，分析研究对象和其他个体的社会关系。这种研究方法是与人类学共通的，但是目前人类学系的学生过于依赖访谈，而忽视了对研究对象长期观察的重要性，我想这一点人类学和灵长类学在研究方法上也应该有很多可以互补的方面。那次聊天相当于我第一次接受灵长类的基本知识，听张鹏兴高采烈地讲他在野外的经历，我感觉到这个年轻人对灵长类学研究有着执著的热情和吃苦精神，这样坚持下去一定会有大的出息。那时候他就已经在国外著名的灵长类研究杂志上发表了十几篇英文论文，其中多篇为 SCI 引用期刊的论文。当时我就建议他来中山大学人类学系工作。2009 年年初，张鹏通过中山大学的“百人计划”成功加盟人类学系，成为国内人类学界第一位灵长类研究的学者。

今年 3 月，日本大地震的前几天，我抱着对于今西锦司教授的崇敬之情，在张鹏的引领下，参观了京都大学灵长类研究所。这才知道这个研究所居然不在京都，而是在名古屋下面一个叫犬山的偏僻小镇的郊区中，原来张鹏去京都看我要走几个小时。我参观了他们的各个研究机构和实验室，也看到了被研究的几十个大猩猩和数百个日本猴。还观摩了大猩猩和人比数字的瞬间记忆实验，结果人类输了；甚至我也试了下，也一败涂地。当然也不会忘记参观研究所旁的世界最大的、集中了全世界不同种类猿猴的猴子公园。

通过这次考察让我更加深刻体会到今西锦司教授建立京都大学灵长类研究所的意义——为完善学科体制和灵长类学发展奠定了基础。人类也是 600 余种灵长类中的一种，非人灵长类（猿猴）与人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com